

ローマ人への手紙 第12章 5節

「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」

キリストに結ばれた者たちの姿と在り様を語る。教会堂に大ぜい集っていたのだろう。そうとも限らなくてもよいかもしれない。特定の地域に集う群れだけでなく、あらゆるところのキリスト者の姿と在り様をも語っているかもしれない。キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとりが互いに器官である。ひとりひとりからだの部分部分を成し、それでいて各自が異なり固有性を持っているということである。キリストに在ることは別として、ユニフォームを着ているのではなく、また、同じことを同じように行うことでもない。そのようにキリストのからだを構成している。

春から夏にわたって咲く薔薇を見ていると教えられ、不思議な調和と美を感じる。一つには、同じ幹なのに色合いが異なる花が咲く。咲く花の形が異なっていることもある。同じ花でも、時間経過とともに色合いが変化する。一つの幹から枝々がバランス良く伸び、支える先で、異なる花形、色、変化が起こる。そのすべてを受容し合いながら、花それぞれのいのちを表現し、一輪を、また全体を見る者のところを動かす。